

逗留仕候へども、後には影もみえず罷成、空敷又金澤へ立歸り此段申上、迷惑がり候へば御笑被成、金子など被下、京都へ罷歸候。以後々々迄も此事申出で嘆き申旨、其孫清十郎某に向ひ物語仕候。

一、竹生島の中納言松

琵琶湖の竹生島は一石山にて、船にて參候も、あがり口は只一箇所有之体候。某西近江海津邊より、舟にて罷越候時、島の半腹絶壁の所に、そなれ松の見事に枝たれ候松有之候。船頭申候は、此松は千貫松とも、中納言松とも稱へ候旨申候に付、其いはれ有之かに尋候へば、加賀中納言様御上洛の時、一度此島へ被成御座候。其節は此松別て様子も見事に候故、御目に留り、金澤へ指越候様に今津・海津の者共へ被仰付、其節指上候はゞ、千貫目御褒美可被下旨被仰渡候へども、如何に仕候てもこぎ申難成、御斷申上候。此故此名付申候旨申候。

一、尼子半左衛門と河合内匠

慶長十六年辛亥微妙公十九歳の時、於金澤御城内、尼子半左衛門初御見小姓、此時御稱御手うちにて被成候。此趣は或時御子

前無子事は知れ申事ながら、如子に仕罷在候とて、御笑被成候程の様子也。藤八歳の時内匠と御改稱、百五十石御加増被下、二百五十石に成申候て、微妙公へ御附被遊候。半左衛門御手討以後、御家老衆指圖にて、内匠は越中氷見國泰寺へ立退け被申候。國泰寺に罷在候内、前髪も取申候。此時瑞龍公は守山に御在城に付、金澤より瑞龍公へ御家中の面々、何にても献上物仕候節は、必ず内匠へも音物仕候。是も瑞龍公へ奉對候ての事に候。か様程出頭故、右の節御近習の衆、御手討を留申も尤成事也。右小少將病死の後、爲名跡小泉勘十郎被召出、内匠は今の河合惣九郎祖父也。宅地は味噌藏町以前寺西新七宅より、今の大野木舍人宅懸て其宅地也。扱右の翌年内匠十八歳の時、瑞龍公より御勘氣御免許被成、御馬廻組に被仰付候。此砌は父の名惣三郎に罷成候。又其翌年十九歳にて、大坂御陣御供いたし、山森吉兵衛と一所に鎗を合せ、高名仕候へども、右の首尾有之に付、御取上無之候て、其後は清泰院様御廣式番に被仰付候。微妙公薨去の年、最早身も年寄候間、惣三郎と申も可直やと御噂有之。其段竹田市三郎より内證申聞候に付、

小姓姓名知行何某が部舎にて、右半左衛門并御子小姓河合内匠知行二百五十石酒宴を催し、三味線などもはやし候處、御徒横目見廻り候に付俄に相止め、半左衛門・内匠ともに致歸宅候。然處急に召に參り半左衛門罷出候處、段々被仰立候て御手討に被成候。内匠も召に參候處、又不及罷出候旨申來候。度々の使にて様子不分明、無心許候に付、内匠先づ紺屋坂迄罷越、今の山本源左衛門宅地邊作都と申盲目の家有之、是へ立寄承合候へば、御子小姓部舎にて不作法の仕形有之、半左衛門御手討様子也。内匠も同事に思召にて、呼に被遣候處、内匠儀瑞龍公御寵愛の者にて、其上に微妙公へ御附被成候首尾に候。左様の者を御手討に被成候ては、瑞龍公思召如何可有之やと、御近習にて重職の輩指留置候。内匠父惣三郎、守山御城下にて五百五十石被下、御奉公仕候處、内匠當歳の時、父病死いたし、其妻美女にて後家に罷成候を、瑞龍公被召使候て、小少將と稱し出頭いたし、内匠を部舎子に仕置候處、名を藤と御呼被成、知行百石被下、殊の外御寵愛、晝夜御傍に罷在候。或時上使有之時分、御膝の上へあがり罷在候。扱々にくき奴めかな。手

或時惣三郎より御看致献上候へば、御滿悅被遊候旨被仰出候。此年十月御逝去被遊、其翌年當公より百五十石御加増被下、四百石に被成、足輕頭被仰付。是は大坂表の御下心も有之由、いづれも申候。享保七年八月、富田甚五衛門話。

一、有徳公逸事三ヶ條

今東都の町醫、勢州白子の人外海玄釣は、紀州領の者也。此人の話に今の上様、有章公薨御の日、俄に爲召御登城にて、直に御繼續被成候に付、再び紀藩へ御歸不被成候。然處終に御居間邊御道具の類、一物も御取寄不被成候。被召使候衆とても、其日の當番人奥表とも被爲召、其外は終に召不申候。常々大屋武右衛門と申人御氣に入り御召使に候。此人御格別に候間、多分御召可被成と、諸人奉察候に、是も終に御呼不被成候。只今五、六百石取足輕頭相勤候。御道具の類、御召料の御鑑冑并御刀・脇刺の御指替等、か様の御身にそひ申もの一色宛、是も當番にて被爲召候。御近習衆心附候て持參仕候。か様の儀にて存知候へば、聖人の様に奉存候。只今御吝蓄の様に申儀は、一圓無之儀に存候。兎角非常の君と可申候。桃溪話